

学習形態 Zoom での講義

テーマ 『教行信証』とは何か。

— 『教行信証』撰述の意図 —

第二部

『化身土巻』に学ぶ（7）

今回は、三願転入について考えていきたいと思います。前回申しましたが、19・20願と18願を分けて考える、と申しました。その理由は19・20願の「双樹林下往生・難思往生」はこれまでやってきたように「化身土」の課題でしたね。それでは18願の「難思議往生」は何の課題か、というと、「真仏土」の課題ではなく、「証」の課題なわけですね。単純に考えると、化身土から真仏土に転入するように考える方が自然のように感じますが、そうではなく、「証」の課題なわけですね。

これはどういう意味なのであろうか。「往生」とは浄土に生まれる事であるから、「難思議往生」は「真仏土」に往生すべきと考えてしまうのは私だけでしょうか。そうすると、「真仏土」とは何か、という事になってきます。（もっと突き詰めれば、仏教において究極は「覚り」に至ることであるのに、浄土がなぜ必要なのか。大乘仏教に至っては「自覚覚他」なるも浄土往生は必要なのかという問いが生まれてくる。）

それと、この三願転入を私たちは原理のように考えていますけれど、そもそもこの文面は「ここをもって愚禿釈の鸞」からはじまる親鸞の表白なんですね。その内容も時間の経過も読み取れるわけです。そして「今特に」と今現在に思い立った表白がしめされているわけです。もしこれが原理とするならば、私達も人生の長年かけて行われる展開という事になってきます。皆さんはどう考えられますか？

それと「難思議往生を遂げん」と思われたのは「果遂の誓い」の由によるものである、と言われていますが、それはどこから言えてくるのでしょうか。

前回、「弘誓重なれるによって」という問題を取り上げましたが、それは18願と20願が本からある、という事を申しました。ここでチョット訂正させていただきたいんですけど、本からあるのは19願（p326）と20願（p347）となっております。どちらも「すでにして悲願います」となってます。

そのことから言うと、19願から20願へという事は既に願われていた、（あるいは既に定まっていた）という事になります。それと、20願から18願へという事とは、その質が違うという事も言えるのではないのでしょうか。つまり19願と20願はセットであるわけですね。それを「唯除」と「果遂」の関係でいえば、18願から20願という方向性はあるわけです。しかし「果遂」から「唯除」へという方向はあり得ないわけです。

（ついでですが、この文の後に、「難」そして「信不具足」「聞不具足」が出てきまして、そして「善知識」が出てきて、そして「悲しきかな、垢障の凡愚・・・」と出てきます。この一連の流れを見ると、この悲嘆述懐まで流れていることがわかると思います。この流れから、三願転入と、そしてその後の「いよいよこれを喜愛し、特にこれを頂戴するなり。」と、ここまでがp346の「それ濁世の道俗、」という文から始まる文章の流れになります。）

それから、この三願の分け方に、19願と20・18願という分け方も考えられます。どういうことかと申しますと19願の「双樹林下往生」は具体的な行動における往生です。それに対して20・18願は「難思」と「難思議」という人間の「心」を現しています。「思い難し」と「思議し難し」というわけですから、前者の外面の問題に対して後者は内面の問題ですね。そういう分け方もあるわけです。この三願を図式にしてみると、

19願 → 20願 → 18願

回入 転入

(p 356)

というように、三願が全部「転入」ではないんですね。親鸞聖人は「回入」と「転入」とはただ気まぐれで使い分けているわけではなく、やはり「回」と「転」の違いを使い分けて、それぞれ違う事を示されているのだらうと思われます。

これらの点をふまえながら、読み頂いていきたいと思ひます。

課題47 「三願転入」考

(1)「久しく・・・仮門を出でて」の「久しく」、「永く・・・往生を離る」の「永く」という表現と、「ひとえに・・・心を発しき」の「ひとえに」の表現、そして「速やかに・・・心を離れて」の「速やか」の表現は、前回は触れた「継続」と「即時」という問題と重なってきます。「教我思惟」と「教我正受」ですね。「思惟」は継続、「正受」は即時ですね。これは『観経』だけの話ではなく、法蔵菩薩の「五劫思惟」と「之摂受」という本願の成り立ちそのものが「継続と即時」であるわけです。

それを踏まえて考えるならば、親鸞聖人は19願の世界を離れるのにかなりの経過を要したという事を述べられているのでしよう。その時間的経過は「思惟」を示しているのでしよう。そしてその思惟を止めるときは「確信」を得た時でしよう。逆に言えば、「確信」を得るまではどこまでも「思惟」していかなければならない、という戒めでもあると言わざるを得ません。

そういたしますと、19願から20願への「回入」で完結するはずであります。この「回入」という言葉も、この20願に「至心回向の願」と名付けているように、そして18願の成就文に「至心に回向したまえり」と出てくるように、「回入」は「回向に入る」という意味としてとらえることができるのではなからうか。

しかし、親鸞聖人においてはそうはならなかつたわけではす。

それはなにか、と言えは、この「ひとえに難思往生の心を発こした」その「ひとえ」さに問題があるのだ、という事ではないかと（それと「発しき」の「き」という言い切り方において）、私は察するのであります。その辺、皆さんはどう思ひますか？ 私はこの「ひとえに」という言葉に「必死さ」を感じますが、親鸞聖人は「難思往生の心」を発こすその「ひとえさ」に何を感じられたのであろうか。吉水教団において法然門下の人々は「雑行を棄てて本願念仏に帰す」という姿勢であつたはずではす。当時念仏弾圧のなかで、やはり「必死に」ならざるを得なかつたのでしよう。

すべて宗教の信仰というものは、「必死に」なればなるほど、その宗教に固執し独善的になつてくるという現象は否定できないわけではすね。多分に親鸞聖人も、なにかしらそういう心境があつたんではないかと察するわけではす。それを感じさせる言葉が、「しかるに今」という言葉ではす。この言葉は転換の瞬間を頭わしているでしょ。だからそれまでは、「難思往生」を願っていたわけではす。「それでよし」と思っていたわけではす。ところが「今」、その「真門」を出る、というわけではす。

今までは「善本・徳本の真門」であつたのですが、今は「方便の真門」だつた、と気づいたという事なんだろうと思ひます (p356)。その中身は親鸞聖人自身しかわからないのですが、私達はそれを思い巡らし聞いていかなければなりません。

それでは、今までそれが最終の求めるものと思つていた、それが方便だと気付かされたのは何によつたのか。そういたしますと、それを気付かしてくれたのは、「果遂の誓い」だつた、という事ではす。

私たちは、この三願転入をホップ・ステップ・ジャンプのように考へていましたが、そうではなく19願から20願への回入だけがあるわけでは、20願が20願を問い直してきたのが20願だつた、というのが親鸞

聖人の感覚ではないでしょうか。そんな気がいたします。そこに「転入」という意味があるんじゃないですかね。「回」と「転」に違いです。

(2) この20願を「確信」という表現で申しましたが、この「確信」に問題があるというのが親鸞聖人の課題であります。20願の「真門」は真実と思っていたけど、実は「方便の真門だった」という事ですね。つまり「真実ではなかった」ということです。それではなぜそう思ったか。それを少し述べておきたいと思います。

『化身土』p346では「罪福を信ずる心をもって本願力を願求す」これを「自力の専心」と述べられています。これが「真門の方便」ですねp346-11. この「自力の心」という言葉に私は惹かれます。

言うなれば、「確信」とは「自力の心」である、と。この事を少し考究してみたいと思います。

自分が「確信」するとき、何をもって確信するのか。それは自分の持っている価値観や思想、道徳や理性等によって是非を判断していく自らの合理性によるものであります。しかしその合理性は自己という範疇における合理性でしかないわけです。「確信」も単に合理的確信であるならば、宗教を名乗る必要はない。宗教はその合理性を一步踏み出す(超える)「非合理性」でなければならない。したがって自己の「確信」を超えて「難思」という世界をもとめることになるわけです。

(3) ここで「難思」世界を求める宗教的意義を見出されるわけですが、それは「自己」を超えていながら自己存在に内在されているわけです。言うなれば、自己が納得する(確信する)思慮を超えた「難思」世界を求めながら、求めている「難思」世界は自己の範疇を超えてはいないことになります。

自己が今までの自己から一步進化する、というような意味合いに感じられますが、それは、19願の成長過程であって、今はそういう継続的過程ではなく、明らかに転回する形相を意味します。それを「転」ではなく「回」と言ってきましたが、内容はどちらも「転回」の意味に変わりはありません。けども問題は、自己範疇の中で自己が転回されるという事なのです。言うなれば「回」というのは自分の周りをぐるぐる回っているだけの事なのです。それに対して「転」とは転ぶという意味がありますね。「ひっくり返る」という事です。

前回、本願文は順番に整列している、と言われた先生がいた、という事を申し上げましたが、もしその線で行くならば、20願から18願に戻るという事は、いわば「転落」でしょう。「回」というのは、回りながら発展していくイメージがありますが、「転」はひっくり返って転げ落ちるというイメージです。19願から20願という展開はいわば「自己改善の範疇」の転回にはほかなりません。親鸞聖人がそういう意味でこの文字が使われたのかどうかは、わかりませんが、また、本願文に対しても順番通り見る見方をされておられたのかもわかりませんが、19願・20願はセットになっているという事を述べられているのでその流れは当然性を感じます。また「転」という漢字はその意味から探ってもあながち間違いとも言えないわけです。そのことを、18願と20願に当てて言いますならば、18願は「唯除」、20願は「果遂」ですので、20願は「必ず救われる」ということで、18願は「(五逆・謗法は)救われない」という事ですから、20願の「救われる」から、18願の「救われない」へ転落することになるわけです。

これを「往生」という言葉に関してみれば、難思往生から難思議往生になるんですけど、三願転入という事から言えば願の転入ですから、いま言った「転落」ということになるのではないかと、考えるわけです。

(4) そういたしますと、この事に二種深心が当てはまってきますね。18願は「機の深心」そして20願は「法の深心」がピッタリはまってくるのです。ということは、19願から20願へと救済の道を歩んでくるわけですが、「難思往生」という救いに救われて、救われたところから「救われない」ところへと「転入」していくわけでありませぬ。

果たしてそんなことがあり得るでしょうか。一生懸命努力して、往生まで到達するのでありますが、この時そこから「転落」ではなく自ら(望んで)「転入」していく、という事を望むであろうか。それ以上に向上していくのだ、というならわかりますが、自ら転落の道を選んだりほしきないでしょう。それはなぜか。親

鸞にとって当時の吉水教団の中で思い当たることがあったんでありましょう。念仏して生きている仲間たちの姿を見て、疑問を持たれたに違いないと、私は戴いております。そしてここから窺えることは、その 20 願からの脱出だったのではないかと、私は思います。そしてその脱出の根拠は、まだ「救われない」人々を見ていたからに違いないと思います。その方向が還相回向という方向なのだろうと思います。そうすると、ここから 22 願「還相回向の願」へと進んでいく事になるわけです。ところが、親鸞聖人はそうはならず 18 願に戻ります。ところがちょっと注意しておかなければならないことは、「三願転入」と言いますが、述べられている文面は「三往生」で表現されているわけですね。そうすると「難思議往生」を求められるのも納得できるわけです。そしてこの「難思議往生」は「証巻」の表題ですので、「証巻」の課題になるわけです。

(5) したがって、この「三願転入」の原理は「証巻」の往相回向から還相回向への展開の論理として、ここ、「化身土巻」で取り上げている、と考えることができるわけです。この事を親鸞は、単なる原理・論理ではなく、自らの信仰として、単なる自己変革ではなく、自己そのものの変革を願われたのではないかと推測させていただいております。(あるいは変革を実感していたのかもしれませんが。) 自己内に起こる自己変革はいくらでも成し得るわけですが、自己そのものの変革となるとそうは行きません。そして「自己そのものの変革」はどうなることなのかとも想像を超えています。それではそれがどこにおいて成り立つのか。それは自己自身で成しえることはいわば不可能です。そうならば自己とは別の何かによって起こされて来なければなりません。その「別の何か」とは何か。それを言うならば「他」です。「絶対他」なるものです。この「絶対他」なるものによってのみ、自己をも超える自己変革が成しえるのではないかと思います。これを「難思議」の世界と呼ぶのではないかと考えます。

親鸞はその「絶対他」なるものを「如来」と呼び、その御恩を深く感じていらっしゃるのだと思わされております。今回はここまでにいたしましょう。

法存の独り言

★ 大乘仏教への疑念 — 自分が信じるのみであればそれでいいが、他を信じさせることが果たして正しいのか。「自覚覚他」、「自信教人信」、「往相・還相回向」。カルト宗教の勧誘とどこが違うのか？ お金さえ取らなければ、正なのか？